

日中にかかる  
緑の銀河

三沢 正博

中国の友人からぞくぞくと手紙が届いて、あちこちで嬉しい悲鳴があがっている。

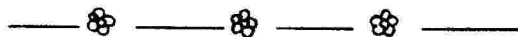
昨年9月北海道大会で公開講演を頼まれ、演題を考えているうちにふと思いついたのが、上の表題である。この言葉の最初の使い手が私なのかどうかは知らないが、現実になりつつある日中世界語者交流の最近、わが意を得たりと自己満足している。

アメリカの有名なジャーナリスト、エドガー・スノウに「中国の赤い星」という名著がある。高杉一郎氏の名著「中国の緑の星」が前書にヒントを得たのかどうか存じ上げないが、私の演題の直接のヒントは、高杉氏の前書である。尤も、私の頭の中では、この「赤い星」と「緑の星」とが、ずっと長く共存していて、昨夏北京大会に参加したとき、この共存の現実をこの眼で見て、痛く感動した。9本の赤旗に囲まれて、ひとときわ高く翻っていた緑星旗を見たときの感動は生涯忘れられないだろう。

中国の世界語者からの手紙には、申し合わせたように、「中国の世界語運動を援助して欲しい」との一文がみえる。そのたびに私は、これはむしろ逆だろうと思わないではいられない。あたかも銀河のように、日中間にかかりつつある緑の星の流れは、美しく壮大である。しかし、銀河はまた幻想を呼ぶ世界でもある。われわれは、これを幻想に終らせてはなるまい。中国が永遠に緑の銀河

を支える強力な大地であって欲しいと願わずにはいられない。

以上の文章は、R. O. に投稿したものであるが、「多数の読者には分からないだろう」おそれがあるとの指摘をいただいた。確かに舌足らずの点があるので、本誌面を借りて、次号から許されるなら、何回かにわたって、解説風に書かせていただきたいと思っている。



エスペラント文献  
の札大への寄贈

去る2月3日、北海道エスペラント連盟所蔵のエスペラント文献(段ボール箱3箇)を、札幌大学図書館に寄贈した。

従来、北海道教育大学の三沢研究室に預っていたが、同大学が、札幌市北区篠路拓北に移転するので、保管の点でも利用の点でも、最適である札幌大学に寄贈した。札幌大学は、語学の札大を自負しており、図書課長佐藤碩夫(のぶ)氏は、非常に好意的で、この機会にエスペラント文献の蒐集整備を計りたいといっておられるので、同学諸氏の御協力を願ってやまない。(三沢記)



〔脱字、誤字のお詫び〕

前 N-ro 16 の3頁に掲載の三沢正博氏の“ザメンホフ祭を終えて”の記事中、後段2行目塵にさされるとくらしいことだろう。の間に次の脱字がありました、又同頁の最後から5行目の惜は梅のあやまりでしたのでお詫びして訂正します。

ことはない。「何をあらためて」と思われる

## エスペラント発表百年展開催 La 100jara Jubilea Ekspozicio de ESPERANTO.

と き：3月12日～18日

ところ：札幌NHKギャラリー

SES主催のE展をKIEGから借用したパネル13枚（E文法概略、原水爆禁止の取組み、E放送の現況ほか）と世界エス運動の現況やSES会員の文通相手国を世界地図で示すことに加え、北京大会写真、北京大会後 Gemel-urbo 瀋陽を訪問した時の歓迎風景、最近のSESの活動を示す写真など延べ2140cmの壁面いっぱいに掲出。またその壁裾に並べた長卓子には所狭しと書籍・手紙等を配置しますまずの出来映えといえよう。初めの2日間約150名の来場者あり。（木村記. 3-14）

### ラジオから

#### 「サルーン！」

NHKラジオのミニ番組「世界とコミュニケーション」の3月はエスペラントです。2分間と短いものですから、お聞きのがしのないように！

#### ★NHK第一放送

11:53-11:55 10日(火)、13日(金)、24日(火)、  
27日(金)

19:28-19:30 15日(日)、29日(日)

#### ★NHK第二放送

12:53-12:55 9日(月)、12日(木)、23日(月)、  
26日(木)

15:58-16:00 11日(水)、25日(水)

#### ★NHKFM放送

11:48-11:50 11日(水)、25日(水)

◆聴取されましたら、お近くのNHK放送局又は下記までご感想をお送り下さい。

〒150 東京都渋谷区神南2-2-1

NHKラジオ制作部 ふれあいラジオセンター

(北島 瞳 記)

## 「ある理想主義者たち の群像」を見よう！

東京で世界大会が開かれた前年にNHKが製作、放映したフィルムがビデオテープになって北海道にも届いていますので多くの方に見ていただきたいと思います。御希望の方はHEL事務局まで御一報下さい。なお、ごらんになった感想をお寄せいただきたいと思います。（北島 瞳 記）

### エスペラントによる 北京放送を聴こう！

—これからラジオを買う人のために—

最近では海外放送を聴く人が多くなってきましたが、これから始めようとする方には、ちょっと奮発して北京放送などが聴け、目覚ましにもなる予約タイマー付きのラジオを買ってはいかがでしょうか。

私が推薦するのは次の2機種です。

(ラジオを超えたラジオ)

#### (1)ソニーの〈ボイス・オブ・ジャパン・マルチ〉

品番ICF-200ID、¥69,800。

32局メモリー選局、AM、FM、SW。

重さ1.7kg。

#### (2)ソニー品番ICF-7600D

¥46,800。10局メモリー選局、AM、

FM、SW。重さ640g。

安く入手する方法

マンデー札幌店（倉庫のような店で注文で取り寄せてくれる。25%引き）＝北21西5-18 ☎011-716-8403。通信販売の場合は、電話で注文し、銀行振込。

Radio Pekino 放送時間 毎日20:00～20:25

周波数 9480kHz, 6955kHz。

(足寄町 浜田 国貞 記)

## 札幌雪まつりに 緑星旗ひるがえる

阿部 映子

札幌雪まつりでは毎年、市民グループが小雪像をつくります。市民の広場は会場の隅に追いやられているものの、いわば雪まつりのふるさとといえるものです。わたしたちエスペラント仲間もエスペラントの宣伝をかねて、雪像づくりに挑戦しました。約5倍の拙せんをくぐりぬけ、補欠繰り上がりの幸運にめぐまれて、大通り会場8丁目H TB広場・熊本城大雪像のすぐとなりという、目につきやすい絶好の位置を占めることができました。

雪像は高さ1m、幅・奥ゆき各3mの雪の台上に据えられた2m角の雪の立方体を削って造ります。高さは地上3m以内、着色・電飾は禁止などの制限はありますが、わたしたちは素人の強みをいかして制作にあたることにしました。雪像のテーマは安定感があり、みなに親しまれ、そしていま赤ちゃん誕生で話題のパンダです。製作グループ名は堅苦しい〇〇会の名称を避けて、多くのエスペランチストに参加してもらえるように、“北海道エスペラントグループ”とし、本誌上で強力を呼びかけました。

タイトルは“友好の緑の星をもつパンダ”。百基ちかい市民雪像のなかで、いったいどのくらいパンダがあるか気になりましたが、ことしはウサギが17基と多く、パンダは3基だけだったのでひと安心しました。製作期間は1月30日(金)から2月3日(火)までの5日間でしたが、みな仕事や家庭があり(もちろんエスペラントの学習も)忙しいため土曜・日曜日を中心に作業計画をたて、作業中は毎日、緑星旗をかかげることにしました。設計図と工程表は阿部が準備しました。

なにしろ雪像づくりの経験者は小学校時代に校庭につくったことがある、というひとりだけのスタートでした。しかも男性はふたりしかいません。女性といえどもスコップを手に堅い雪像を削ってゆきます。途中まで削った時点で万里の長城をパンダのうしろに積みあげてゆきました。長城の壁には“ESPERANTO”と“世界語”の文字がはいります(国際語だと際の字が複雑で難しいという技術上の理由で世界語にしました)みな一度は地上3mの長城のてっぺんに登りましたが、上から見るのもおもしろい経験でした。

製作グループの中心は、土曜・日曜ともはるばるかけつけた北島瞳(苦小牧)、渡辺康子(千歳)を含めた Rondo-Pupiloj の8名でしたが、小林貴美子、瀬川綾子、小淵修子、高橋のぞみさんたちも参加してくれました。製作期間中の夜は美しい星空が続き、気温は低かったけれど風がほとんどなく、寒さはそれほど感じませんでした。滑落事故者一名をだただけで、“友好の緑の星をもつパンダ”は2月1日の夕刻に予定よりはやく完成しました。

ことしの雪まつりで、大通り会場に足をむけた約150万人の見物客の目にエスペラントの文字が飛込んだと考えるなら、今回の雪まつり参加は大成功だったとおもっています。



## *Pri kelkaj rememoroj*

Tameo NITTA

Karaj ĉeestantoj !

En la lasta nokto mi ne povis ĝui profundan dormon, do mia kapo estas ankoraŭ nebula, pardonon !

Kara samideanino F-ino Baba el la urbo Sapporo telefonis al mi, por ke mi parolu ion ajn en la kongresejo rilate al Esperato-movado. Sed mi estis konfuzita, ĉar mi estas nekapa fari paroladon ĉi tie, tamen ŝi persistis, do fine mi estis devigita ion paroli hodiaŭ ĉi tie dum ĉirkaŭ 10 minutoj.

Nu, antaŭ ĉio mi petas al vi pardonon, ke ofte mi erare uzas vortojn, precipe pri la verboj transitivaj kaj netransitivaj, pri tio ne ofte S-ro Kiyosi MITUISI el la urbo Nagoya riproĉas min kaj mi kontraŭriproĉas lin, kaj do, inter mi kaj li daŭras vera interamikiĝo kaj interkorespondado, ĉu ne ?

Retrorigardante mian esperantistan vivon, jene mi parolas, tamen fuŝe, unu epizodon, pri kio ankoraŭ mi bone rememoras, kvankam jam longa tempo forpasis de tiam, kiam mi vizitis la oficejon de J.E.I. en Hongo-motomati, Tokio. Mi interbabilis kun S-ro Sihei MIYAKE, kiu estis la sekretario

de J.E.I. (jam forpasinta), pri Esperanto-movado, kaj mia interbabilado hazarde tuŝis la temon pri la nombro de esperantistoj en Japanujo. Mi diris al li, malgraŭ tio, ke bedaŭrinde lastatempe Esperanto-movado en Hokkaido stagnadas, tamen en mia malgranda vilaĝo, kiu havas ĉirkaŭ dek mil loĝantojn, estas la aktivaj esperantistoj 3~4, kaj en urbo Tokio havas pli ol dek milionojn da loĝantoj, do, proporcie al loĝantaro, en la urbo Tokio devas esti la aktivaj esperantistoj miloble 3~4 mil, sed bedaŭre ne tiel multe; tiam la membro de J.E.I. estis malpli ol 2 mil, do mi estis iom fierra pri tio.

Kaj en la milittempo, antaŭ 48 jaroj mi interkorespondadis kun la multaj eksterlandaj gesamideanoj, el kiuj estis la bela kaj inteligenta S-ino R. Bergereau, kiu estis franca esperantistino, kaj ŝia edzo estis ĉarpentisto. Mi ĉerpas kelkajn frazetojn el ŝia letero kaj prezentas al vi ĝin.

Ŝi skribis: mi tre ŝatus lerni aliajn lingvojn, se mi havus sufiĉe da tempo, Esperanto estas ja la plej facila, kaj skribante, mi ne scias, kiun lingvon mi uzas pli lerte, Esperanton aŭ Francan, Esperanto fluas sub mia plumo tiel rapide kiel la alia, kaj konversacion mi ŝatus, se

mia edzo estus Esperantisto, ke tiu belsona lingvo estu nia hejmlingvo, plie ĝi estas ideala lingvo por la homaro.

Nu, jam tempo mankas, do, anstataŭ daŭrigo de mia fuŝa parolado, ĉi tie mi prezentas al vi la interesan kaj instruan artikolon, kiun lastatempe mi legis en la gazeto "La Espero el Koreujo". Jen estas:

El multaj leteroj adresitaj al la redakcio, min trafas precipe la leteroj, kiuj afable indikas la lingvajn erarojn el nia gazeto, ĉar plej gravas la korekta lingvo en tia oficiala gazeto, kia la Espero, tiuj indikoj havas apartan signifon por la redakcio. Kiel koreo, kiu uzas gramatike kaj vorte malsaman lingvon, mi ofte konscias, ke Esperanto ne estas tiom facila lingvo, kiom multaj asertas.

La letero de D-ro Albault la prezidanto de Akademio, kiun mi lastatempe ricevis, donis al mi multe pripensigan taskon. Li klarigis la nuntempan problemon de nia lingvo, kiu estas infektata de du flankoj, unu estas tiuj esperantistoj, kiuj tro ofte uzas ne necesajn neologismojn kaj alia, ... (preterlaso)

Verdire tia informo estas la unua por mi kaj mi kore danks lin pro lia afabla averto.

Ĉu Esperanto devas esti tute logika kaj inda je artefarita lingvo ?

Aŭ, ĉu Esperanto evoluu laŭ la natura vojo tiel same, kiel aliaj etnaj kaj naturaj lingvoj ? Ŝajnas al mi, ke tiaj demandoj estas ankoraŭ super mia povo.

Mi finas mian fuŝan paroladeton.  
Koran dankon pro via aŭskultado !

(編集者からひとこと)

前号に引続いて新田為男さんが第50回道大会で述べられたエスペラントによる講演内容をここに掲載しました。前号で切替さんが強調された“pli simplan kaj facilan stilon”に関連して新田さんも次の様に所見を寄せています。

「ここで紹介した韓国の La Espero の編集者の悩みは、日本のエスペランチストとして良く理解することが出来ますね。Prezidanto de Akademio が嘆いているように、ne necesajn neologismojn をことさらに使うお偉い方が多くて困ります。

切替君の嘆くのも当たり前、少ない易しい語源を使って豊かな表現をするのがESP.のいいところと思うんだけど.... 50年前、関西の若い人が切替君と同じ意見を堂々と主張されたことが懐かしく思い出されます。古くて新しい重要な問題提起ですね。」と。

新田さんのエス文は、平易な用語と前置詞や動詞を上手に使うことによって、このように豊かな表現ができるという、見本かと思います。是非御一読ください。

# EL LA HOKKAJDO-GAZETARO

★《北海道新聞》昭和62年1月5日から夕刊に連載された中国人の札幌大学留学生ペイジュンさんの“留学の地 札幌と私”の17回目1月24日付に昨年の北海道大会の写真入りで“娘と覚えたい言葉”と題し下記の記事が掲載された。

南京のおばあさんの手紙を受け取りました。娘のシャンシャンはたくさんのことばを覚え、小犬とアヒルの鳴き声を上手にまねすることができたと、いかにも年寄りらしく、娘のことをこまごまと書いてくれました。

昨年の秋、北海道教育大学の三沢先生のご案内で北海道クリスチャンセンターへ行き、第50回北海道エスペラント大会に参加しました。エスペラントに関する知識は何年か前に、栗原小巻が中国の男優とコンビになつて、有名なエスペランティスト、長谷川テルの一生を描いたテレビ番組があった、ということだけです。

エスペラントは、1887年、ワルシャワの医師ザメンホフが作り上げた、いわゆる国際語です。28の発音で、アクセントはすべて後から数えて2番目の文字にあたり、構文も平易で、中立公平な言葉として、国際的な連帯と平等を願うには大変役に立つ言葉だそうです。長谷川テルはかつて戦火の中でエスペランティストとして、中国に渡り、日中友好の懸け橋になり、国際主義を貫き通すため、35年の生涯をささげました。エスペラントの旗印は緑の星、それが言葉であるとともに内在思想であり、人間の生き方である、とも言われています。

その日の大会は、昨年の8月、北京で開催され、50カ国も出席した世界エスペラント第71回大会から帰道したメンバーの報告会です。出席者の中には、年配の方もいましたし、若い学生もいました。かれらはみな世界の平和、各国の人々と国境のないつきあいを願って、すすんでエスペラントを習い始めたのだそうです。何十年もずっと続けてきた人もいます。三沢先生も、その一人です。

現在、世界90カ国の中で1000万のエスペラント学習者がおり、大多数はヨーロッパ人で、中国では40万人しかいないそうです。英語は実用的ですが、エスペラントは理想的だと私は思いました。娘ができるのがアヒルの鳴き声だけというのでは、寂しいかぎりです。早く大きくなって、エスペラントも覚えましょうよ。

★《読売新聞》3月7日朝刊《解説のページ》に（世界の論調）“東側 エスペラント熱さめず”と題して

ポーランド人・ザメンホフが国際共通語としてエスペラントを創案してから今年でちょうど百年。既存の言語にとつてかわることは出来なかったが、エスペランティストの熱意は続いている。

◇

「エスペラントは、当時のロシア領ポーランドのベアリストク町で育った若き理想主義者、眼科医ザメンホフによって創始された。この町のポーランド人、ロシア人、エストニア人、ラトビア人、ドイツ人といった住民たちは、言語が異なるために互いに誤解し、不信感をつのらせていた。

彼らに共存の道を開くような、共通の新しい言語を作る——というのがザメンホフの夢だった。彼は28才の時にエスペラントを発表した」

「エスペラントの特徴は、簡潔性と徹底した論理性にある。例えば、スペリングと発音の関係がバラバラでまごつく英語と比べると、エスペラントはスペリング通りに発音する。英語は不規則動詞の変化が728通りもあるが、エスペラントの文法では16の規則があるだけだ」

「歴史的に見ると、トルストイは初期からの支持者だったし、ユーゴスラビアの故チトー元帥もかつては定期的にオーストリア大統領とエスペラントで文通した。しかし、スターリンはエスペラントを“スパイの言語”と決めつけたし、ヒトラーは社会を破壊するとして1934年に禁止した」

「エスペラントを第2言語として世界中に普及させようというエスペランティストたちの夢は実現しなかった。しかし、彼らはあきらめていない。バチカンのカディ神父は10年間エスペラント放送を続け、主に“鉄のカーテン”の向こう側の聴取者から、毎月約200通のファンレターを受け取っている。ソ連で昨年、ロシア語によるエスペラントのテキストが出版された時は、3万部が1週間で売り切れた。昨年、北京で開かれたエスペラント国際大会に出席した米国のジャーナリストによると、閉鎖的な社会の中国やイラン、東欧諸国に熱烈な支持者が多いという。百周年記念大会はこの7月、ポーランドのワルシャワで開かれる」

（米「USニュース&ワールド・リポート」誌 3月2日号）



“魚眼図”「エスペラント」

ピウスツキの蠟管の発見者であるパンチェロフスキ氏が日本語の勉強を始めた時、文字体系のあまりの複雑さに業をにやし「日本語のローマ字化なくして日本の国際理解は進まない」といい張った。日本語を流暢に話すのに新聞も読めない外国人や、教科書の漢字を誤読する学生、それに今だに誤字を書く我が身を思うと内心じくじたるものがあった。

近頃はとみに日本の国際化の必要を口にする人が多いが、その最大の問題は言語、特に文字にあるといつてよい。戦前2度に及ぶ弾圧を受けたあの大本教の出口王仁三郎がエスペラント運動へ加担したのも、日本語の非国際性が彼の目差した全世界的布教の障害になるとの認識に基づいていた。王仁三郎語録にこんなものがある。

「私の靈感によりますと…十年を出ずしてエスペラントを知らぬ者は必ず時代後れになってしまう…私は今エスペラントを日本ばかりでなく…ザメンホフ博士の生まれた国のほうへ逆輸入してやりたいと計画しております」（「神の国」大正12年12月号）

ザメンホフの生地ビャウイストクはワルシャワからレニングラードへ向かう幹線鉄道ぞいに位置する帯広ほどの都市である。19世紀にはプロイセン領から露領となり、町にはポーランド、露、独、リトワニアの諸語が渦巻いていた。こんな言語環境が後年「エスペラント（期待せし者）博士」の筆名で「国際語」を出版する契機となったわけである。

残念ながら王仁三郎の予言もザメンホフの期待も実現しなかったが、せめて戦後の国語簡略化の流れは逆流しないしてほしいものだ。

（和田 完・小樽商大教授＝心理人類学）

《北海道新聞》2月26日朝刊「読者の声」欄

“エスペラントは今も生きている”

公務員 阿部映子（札幌市北区・36才）

私は、学びはじめてからまだ日の浅いエスペラントですが、18日夕刊文化面の「魚眼図」で、「エスペラント」を読んで、エスペラントは国際理解に役立たず今はもう使われていないと誤解されるのではないかと心配して筆をとりました。

日本でエスペラントがあまり普及していないのは、戦前戦中に国際語をはなすのは危険人物だと

されたことと、戦後になってから英語さえ話せば世界に通用するという考えが大勢をしめたことによるものと思われます。「魚眼図」の筆者は、言語の複雑さが日本の国際化を妨げているので国語の簡略化を進めるべきとの意見をお持ちようですが、多少の手直して国際化が進むとは思えません。

ザメンホフ博士は、異なった言語を持つ人々が話し合い、理解し合うためにこそ学びやすいエスペラントを考案したのです。エスペラントは自分の言語と同じように相手の言語を尊重しますから、決して自分が学べないからその言語をローマ字化すへきだなどとは考えません。エスペラントを国語とする国はありませんし、外国人と話すためにつくられた言葉ですから、一般の方がふだん耳にする機会は少ないと思います。しかし、毎年開催される世界大会では50数カ国のエスペラントが一堂に会し、一つの言葉で会議が進められ、多数のエスペラントがお互いの国を訪問し合っています。もちろん文通をしている人も多数おります。

今年ワルシャワで開催される世界大会は、エスペラント百周年記念と併せて行われるため、参加者は昨年の北京大会の人数を超えて4千人以上になるものと思われます。ザメンホフ博士の期待は、ささやかながら実現していると言えるのではないのでしょうか。

《北海道新聞》3月4日夕刊——文化欄——

“魚眼図”「エスペラント後記」

2月18日付けの本面の拙稿「エスペラント」については2月26日付けの投書を始め道内のエスペラントからのお小言をちょうだいして戸惑っている。

私は現在のエスペラントの国際運動について熟知しているとはいえませんが、昨夏北京開催の世界エスペラント大会のことにはかなりの関心を寄せていたし、なかでも古い友人である大本教の出口栄二氏主幹の雑誌「愛善世界」に連続掲載された北村和憲氏の大会の詳細には大変啓発されたものである。

エスペラントを「期待せし者」と訳したことにもお叱りが多かった。私は言語学者でもなく紙面も限られているので詳述できないが、誤語のおよその根拠を示しておこう。——以下省略——

（和田 完・小樽商大教授＝心理人類学）

《北海道新聞》3月6日朝刊—マイタウン欄—  
“エスペラント展示会”

札幌エスペラント協会は、12日から札幌NHKギャラリーで、エスペラント百周年記念展示会を開く。

エスペラントの歴史、図書、国際交流の写真、エスペラント訳の日本の歌など。入場無料。18日まで。

《月刊さっぽろ経済》—札幌商工会議所発行—  
1987年2月号第1ページの写真版“第38回さっぽろ雪まつり”に「北海道エスペラントグループ」製作の“友好の緑の星をもつパンダ”の写真が掲載されている。

3月7日15:30よりクリスチャンセンターで札幌エス会3月例会が20数名参加して行われ次の事項が決定された。

- 1) 5月までの運営の役員として次の諸氏選任。  
宮岸忠孝、渡辺康子、坂本桂子、切替英雄。
- 2) 当面5月の合宿学習会を実施すること。
- 3) 4月の例会は11日(土)13:30よりクリスチャンセンター・ホレンコでおこなう。  
議題は連休合宿、講習会、会費、その他。  
(切替英雄 記)

北京大会印象記  
のご利用を!

前号でお知らせしたとおり、参加印象記(日本語版)が出来上がっています。参加者12人がそれぞれの印象を興味深く書いておりますので、お友達やお知り合いの方たちにもおすすめいただきたいと思えます。

1部郵送料込みで370円(切手でも可)です。HEL事務局にお申込み下さい。

なお参加印象記を手にした方から次の様な言葉が寄せられています。

☆北京大会に出られた方々の感激も大きく、その後の札幌の皆様は如何ばかりかと想像しております。

☆興味深く拝読させていただきました。皆さまにパンダをお見せできて良かったですね。

☆仏壇にあかりをつけて夫の大きな写真の前で声高く読みあげました。地方の片すみで細々と勉強していて一度も世界大会に参加したことのなかった夫もさぞかしうれしく聞いていたことと思います。(平田岩雄氏夫人)。みなさまの感想もお寄せ下さい。(北島 記)

北海タイムス

昭和62年(1987年)3月13日(金曜日)

トピック

エスペラント  
発表百年記念展

エスペラント語誕生百年を記念して歴史や世界各国への普及ぶりを紹介する「エスペラント発表百年記」



念展」が十二日、札幌市中央区のNHKギャラリーで始まり、市民や市内内外のエスペラントティストの関心を集めている。

エスペラント語は、世界共通語を目指してポーランドの眼科医、L・L・ザメ

と同時に世界平和にも尽力している。

同展は札幌エスペラント会(百原正八郎会長)が百年を記念して開催した。昨年夏に中国で開かれたエスペラント世界大会に出席した会員たちの交流活動を中心に大正末から続く同会の活動ぶりを写真二百枚で紹介。さらに、同会が交流を続けているスウェーデン、ガナナなど三十四カ国を地図

写真や手紙、教材でエスペラントの普及ぶりを伝える記念展

ンホフが一八八七年に発表。現在世界各国に二百万人のエスペラントティストがいる。国単位に組織をつくり、交流と普及活動を行う



とられないエスペラント語の重要性を呼び掛けている。十八日まで。

で紹介し、各国から寄せられた写真や手紙類も展示している。

エスペラント語の文法や特徴をハネル六枚で解説しているほか、世界各国で発行されている教材や関係資料約百冊がずらり。世界の平和のために民族や国家に

★ 速報

今年のHEL学習会  
宿は山部で5月3・4  
・5日開催に決定!  
詳細は後日連絡。